芸 術（音 楽）

1　研究のテーマ

(1) 研究テーマ

組織的な授業改善の推進～新学習指導要領の円滑な実施を見据えた音楽科における主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の実践～

(2) 研究のねらい

上記のテーマを踏まえ、どの学校でも取り扱う可能性の高い、音楽Ｉにおける歌唱、「のばら」を題材として設定し、現行と次期学習指導要領、両方の観点から、学習過程の実践についての研究を行った。

2　実践事例

(1) 題材の指導と評価の計画

① **科目名**：音楽Ｉ(学年：１学年)

② **題材名**：アカペラの響きを感じ取って歌おう

③ **題材の目標**：音色、テクスチュア、強弱などの音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受しながら、表現形態としてのアカペラの特徴を生かし、歌唱表現をする。

④ **題材の評価規準**

a：音楽への関心・意欲・態度　b：音楽表現の創意工夫　c：音楽表現の技能　d：鑑賞の能力

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
・アカペラによる歌唱の特徴に関心をもち、それらを生かして歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	・「野ばら」の音色、テクスチュア、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、アカペラによる歌唱の特徴を生かした音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて表現意図をもっている。	・アカペラによる歌唱の特徴を生かした音楽表現をするために必要な発声、発音、読譜などの技能を身に付け、創造的に表している。	・本題材では設定しない。

学習指導要領との関連

Ａ表現(1)歌唱　ウ　様々な表現形態による歌唱の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。

エ　音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

⑤ **題材の指導計画**

時	学習内容及び学習活動	評価の観点				評価規準	評価方法
		a	b	c	d		
1	アカペラという表現形態に関心をもつ。 ・アカペラの歴史的変遷や音楽的特徴を、ワークシートを用いて学習する。 ・ハーモニーを作る簡単な練習曲(ワークシートNo.３のA、B、C)を歌い、音を重ねることで生まれるアカペラ特有の響きを経験する。	○				a:アカペラによる歌唱の特徴に関心をもち、それらを生かして歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	a:行動の観察 a:ワークシート (No.１-①②③)

2	「野ばら」の各声部が合わさることで生まれる響きを味わい、各声部の役割について考える。 ・「野ばら」の音取りを行い、全体で楽曲の持つ響きを確認する。 ・グループ活動へ向け、自身の強みや課題について整理し、ワークシートに記入する。			○		c:アカペラによる歌唱の特徴を生かした音楽表現をするために必要な発声、発音、読譜などの技能を身に付け、創造的に表している。	c:行動の観察 指導に生かす評価 a:ワークシート(No.２-授業の振り返り)
3	曲想の変化と音楽を形づくっている要素の働きの変化との関わりについて知る。 ・音楽を形づくっている要素を様々に変化させた「野ばら」をクラス全体で歌う。 ・同様の活動をグループでも行い、感じたことについて意見交換をし、グループでの表現について考える。						指導に生かす評価 a:ワークシート(No.２-授業の振り返り) b:ワークシート(No.２-①②③)
4	発声やハーモニー、強弱を意識した表現についてグループで話し合い、音で表現し、実感する。 ・グループに分かれ、各声部のバランスや発声の確認、強弱のつけ方などを話し合い、グループの聴かせどころや、そのために自分ができることについてワークシートに記入する。 ・発表に向けて、「野ばら」の表現をグループで深める。		○			b:グループで音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて表現意図をもっている。	b:ワークシート(No.２-①②③) 指導に生かす評価 a:ワークシート(No.２-授業の振り返り)
5	練習した成果や自身の成長について振り返る。 ・グループ発表を行う。	○		○		a:同上 c:同上	a:ワークシート(No.３-①) c:グループ発表

⑥ 授業実践例(公開研究授業／指導計画４時間目)

学習活動(指導上の留意点を含む)	評価の観点
・前回までの復習。(授業の流れを提示し、見通しを持たせる。)	
・それぞれ意識する点を改めて確認しながら、発声練習も兼ねてワークシートNo.３の練習曲に取り組む。 「練習曲A」→和音の構成と役割　「練習曲B」→歌い出しと和音 「練習曲C」→音形に合わせた発声	
・パートごとに「野ばら」１番を歌い、自分のパートの音を確認する。 ・他パートと合わせる活動や、歌う人数を減らして歌う活動から、自身のパートの役目を改めて意識する。 (音取りに不安がある生徒はグループワーク前に音楽室に残り、音の確認をする。) 	

・グループで歌唱しながら、各声部のバランスや発声の確認、楽曲の強弱のつけ方などを話し合い、楽曲表現について意見交換をする。グループの聴かせどころをNo.２-②に記入する。 ・グループ発表をより良くするために、自身ができることをワークシートNo.２-①に記入する。 ・No.２-③には、グループで決めた強弱や、自身が注意したい点を楽譜に書き込む。（各練習場所で、グループごとに進捗状況を確認しながら、表現の工夫についてのアドバイスを行う。） 	b:行動の観察 b:ワークシート （No.２-①②③） 指導に生かす評価 a:ワークシート （No.２-授業の振り返り）
・ワークシートに個人の振り返り、グループでの聴かせどころ、話し合った内容を記入する。（次回の授業内容を確認し、見通しを持たせる。）	

研究実施校：神奈川県立海老名高等学校（全日制）
実　施　日：令和３年11月８日（月）
授業担当者：青山　拓也　教諭

(2) 主体的・対話的で深い学びの視点に基づく指導と評価のポイント

本題材では、『アカペラの良さや持ち味を生かした歌唱表現』に近づくために、２時限目の活動（アカペラをグループで歌うための自身の強みや課題点を書き出す活動）が、主体的・対話的な学びにつながる。生徒一人ひとりがこの活動を通してアカペラと自分との距離を認識し、課題意識をもつことでその後のグループ活動に主体的に参加できると考え、指導計画を作成した。

その後、グループ内で対話を繰り返すことによる学びの深まりを、３・４時間目の活動への参加状況や個人の振り返りの内容から多面的に見取る事で、生徒の変容について分析・検証を行った。

【指導の検証】

生徒一人ひとりが表現意図をもち、仲間と活発に意見交換をしながらグループでの表現を深めていく姿を思い描いたとき、「ハーモニーの良し悪しが判断できる」ことがまず挙げられた。

そのため、比較的簡単にハーモニーを作ることのできる小品（ワークシートNo.３のA、B、C）を事前学習として設定し、トニック・ドミナントの効果や第３音の取り方などハーモニーを作るための基礎知識を、実感を伴った理解として定着するよう心掛けた。活動後、ワークシートには図１のような記述が多く見られたことから、『美しいと感じるアカペラに近づけるために』グループの中で自分ができること、また足りないところを、音楽的な見方、考え方を働かせて自身を分析している、と見取る事ができる。

③ 美しいと感じるアカペラに近づけるために、実際に歌ってみてよかった点、難しかった点についてそれぞれの項目ごとに振り返ってみましょう。

	発声	ハーモニー	フレーズやタイミング
よかった点	初めの音をしっかり出せた。	音程の変化を意識しながらうたえた。	頭の中でテンポを数えながら早くならないようにできた
今後にどう生かす?	皆で合わせた時に入りやすくできる。	周りにながされないで自分の音をうたえる。	のばらで加速してしまわないように気をつけられる。
難しかった点	ブレスまでが長いので息が続かないこと。	同じ音をうたう時、下がらないようにすること	次の(新しい)小節に入る時に声が小さくなってしまうこと。
その対策	声を調節して、息が合うようにする。	その音をイメージしながら歌う。	吸う息を合わせて皆で入れるようにする。

図１

一方で、「野ばら」をどのように歌うかについて意見交換をする活動では、グループによっては残念ながら停滞する場面が見られた。原因としては、３，４時間目に設定した楽曲の要素の変化と曲想の変化を知覚・感受する場面で、十分な指導時間がとれなかったこと、また事前学習で得た音楽的な経験が楽曲と結びついていないことが考えられる。

【評価の検証】

特に音楽表現の創意工夫における評価について、音楽科の課題として次のようなことが挙げられる。

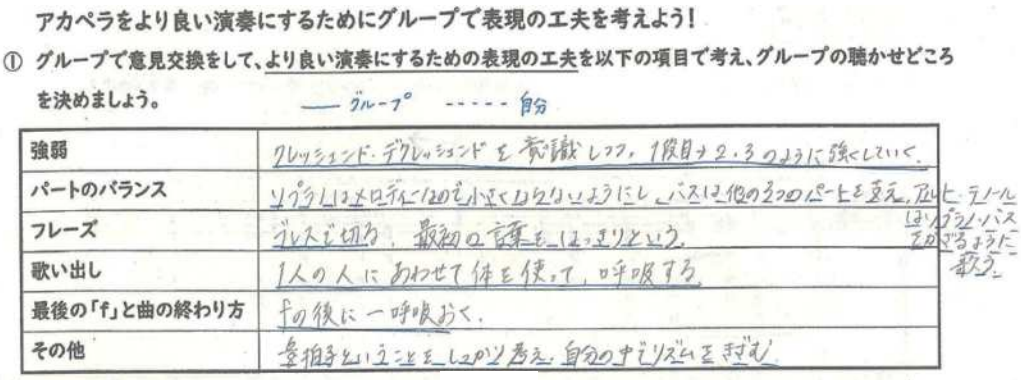
・「どのように表現しますか？」という問いかけに対して、「がんばる」「ミスしないようにする」といったような、音楽の表現意図ではなく、自身やグループの課題や意見に関する表記を生徒がしてしまう。

・グループ活動内での個人の表現の工夫を、教員が見取りにくい。

これらの課題を踏まえ、本事例ではワークシートNo. ２②に、音楽表現の工夫の際に意識して欲しい音楽を形づくっている要素を図２のように項目で示した。

また、グループと個人の考えをそれぞれ示すよう指示をし、ワークシートNo. ２③(図３)と合わせての価材料とした。

その結果、図２で示すような記述が増え、評価の見取りやすさについては改善が見られた。今後は、評価場面を精選して経過を見取り、ワークシートの発問の工夫等について考えていきたい。



アカペラをより良い演奏にするためにグループで表現の工夫を考えよう！

① グループで意見交換をして、より良い演奏にするための表現の工夫を以下の項目で考え、グループの聴かせどころを決めましょう。　—— グループ　- - - - 自分

強弱	クレッシェンド・デクレッシェンドを意識しつつ、1段目より2・3のように強くしていく。
パートのバランス	ソプラノはメロディーなので小さくならないようにし、バスは他の3つのパートを支え、アルト・テノールはソプラノ・バスをかばうように歌う。
フレーズ	ブレスで切る。最初の言葉をはっきりという。
歌い出し	1人の人にあわせて体を使って、呼吸する。
最後の「f」と曲の終わり方	fの後に一呼吸おく。
その他	拍子ということをしっかり考え、自分のすきなリズムをきざむ。

図２

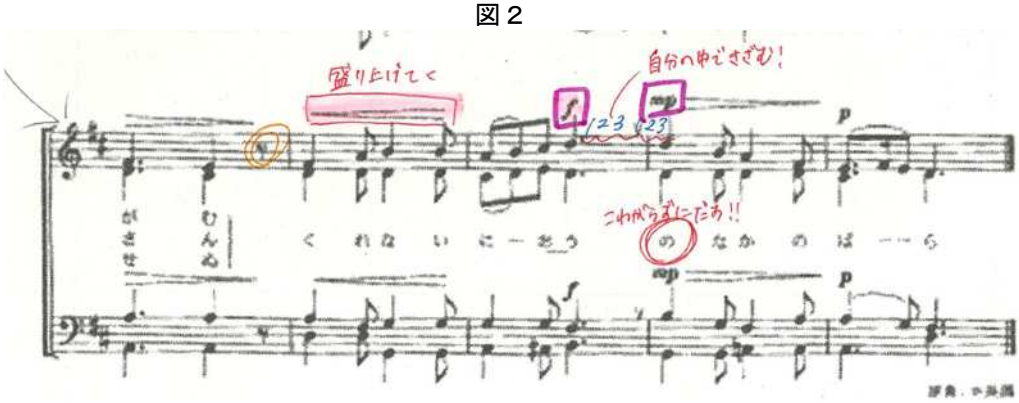


図３

(3) 新学習指導要領の実施に向けた３観点への整理

研究テーマにもある新学習指導要領の円滑な実施向け、推進委員会として本題材を３観点で見直した指導案と、特に留意すべき点について次のように示した。

① **科目名**：音楽Ⅰ(学年：１学年)

② **題材名**：アカペラの響きを感じ取って歌おう　Ａ表現(１)歌唱

③ **題材の目標**：

・アカペラによる歌唱表現の特徴について理解するとともに、創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な、他者との調和を意識して歌う技能を身に付ける。

・音色、テクスチュア、強弱を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもつ。

・ハーモニーの美しさや、グループで音楽を創りあげる活動に関心をもち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組むとともに、感性を高め、音楽文化に親しむ。

今回の学習指導要領の内容には、育成を目指す資質・能力が事項として示されている。よって、目標及び評価規準は、扱う指導事項を基に作成されるため、酷似した内容となっている。一文で示すことも可能であるが、見やすさを考え、今回は箇条書きとした。

④ 題材の評価規準

知・技知識・技能　思思考・判断・表現　態主体的に学習に取り組む態度

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知アカペラによる歌唱表現の特徴について理解している。 技創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な、表現形態の特徴を生かして歌う技能を身に付けている。	思音色、テクスチュア、強弱を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもっている。	態ハーモニーの美しさや、グループで音楽を創りあげる活動に関心をもち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。

前項でも記したように、評価規準は扱う事項を基に作成される。本事例であれば、A表現（1）歌唱の指導事項を用い、必要な箇所を置き換えて示している。
＊『文部科学省国立政策研究所　令和３年８月発行　「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を基に作成

学習指導要領との関連

A表現(1)歌唱

ア　歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、自己のイメージをもって歌唱表現を創意工夫すること。

イ　次の(ｱ)から(ｳ)までについて理解すること。

(ｳ) 様々な表現形態による歌唱表現の特徴

ウ　創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な，次の(ｱ)から(ｳ)までの技能を身に付けること。

(ｳ) 表現形態の特徴を生かして歌う技能

⑤ 題材の指導計画（新学習指導要領に準拠）

時	学習内容及び学習活動	評価の観点 知技	思	態	評価規準	評価方法
1	アカペラという表現形態に関心をもつ。 ・アカペラの歴史的変遷や音楽的特徴を、ワークシートを用いて学習する。 ・ハーモニーを作る簡単な練習曲（ワークシートNo. ３のA、B、C）を歌い、音を重ねることで生まれるアカペラ特有の響きを経験する。	知 ○		○	知アカペラによる歌唱表現の特徴について理解している。 態ハーモニーの美しさや、グループで音楽を創りあげる活動に関心を持ち、主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。	知：ワークシート（No. １-①②） 態：行動の観察 態：ワークシート（No. １-③） 指導に生かす評価 態ワークシート（No. ２-授業の振り返り）
2	「野ばら」の各声部オが合わさることで生まれる響きを味わい、各声部の役割について考える。 ・「野ばら」の音取りを行い、クラス全体で楽曲の持つ響きを確認する。 ・グループ活動へ向け、自身の強みや課題について整理し、ワークシートに記入する。	技 ○			技創意工夫を生かした歌唱表現をするために必要な、他者との調和を意識して歌う技能を身に付けている。	指導に生かす評価 態ワークシート（No. ２-授業の振り返り）
3	曲想の変化と音楽を形づくっている要素の働きの変化との関わりについて知る。					指導に生かす評価 態ワークシート（No. ２-授業の振り返り） 思ワークシート（No. ２-①②③）

	・音楽を形づくっている要素を様々に変化させた「野ばら」をクラス全体で歌う。 ・同様の活動をグループでも行い、感じたことについて意見交換をし、グループでの表現について考える。					
4	グループで、発声やハーモニー、強弱を意識した表現について創意工夫する。 ・グループに分かれ、各声部のバランスや発声の確認、強弱のつけ方などを話し合い、グループの聴かせどころや、そのために自分ができることについてワークシートに記入する。 ・発表に向けて、「野ばら」の表現をグループで深める。		○		思音色、テクスチュア、強弱を知覚し、それらの働きを感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、どのように歌うかについて表現意図をもっている。	思:行動の観察 思:ワークシート(No. 2-①②③) 指導に生かす評価 態ワークシート(No. 2-授業の振り返り)
5	練習した成果や自身の成長について振り返る。 ・グループ発表を行う。	技 ○		○	技、態:同上	技:グループ発表観察 態:ワークシートの確認(No. 3)

知識・技能の評価に関して、評価規準で示している通り別々の場面・評価方法で見取る事が必要となるため、注意が必要である。本事例では知識は最初のワークシートからのみ読み取ることなっているが、知識の変容を見取るためには、題材の後半にも知識を見取る事ができるような場面を設けるなどの工夫が必要である。

(4)まとめ

芸術(音楽)の表現における「主体的な学び」は、生徒が学習対象となるものに興味・関心をもつことからスタートし、諸活動を振り返りながら生徒自身が設定した目標に向かって見通しをもって行われる。完成度を高めていこうとする姿勢をもち、その取組の過程で生徒自身が達成感や成長を感じているか、また「こういう風に歌いたい」というような明確で強い表現欲求をもっているかどうかが重要である。

今回の実践事例では、指導計画において「主体的な学び」の実現に向けた具体策や方向性が示されているが、設定した見通しと実際の生徒の反応や能力に差があり、想定していた学習効果が得られない場面も見られた。学習を成立させるために基盤となる力が弱い場合、生徒は表現欲求をもつことが困難になるため、「主体的な学び」が発展的に行われる可能性は低くなる。今回の実践の場合、表現の創意工夫をグループで主体的に行う場面(4時間目)において、活動の停滞が見られたグループがあった。その原因は、「自分の音程に自信がない」「事前学習の経験が楽曲と関連づいていない」等の個々の課題だと考えられる。そして、こうした事象は珍しいことではなくどの題材でも当然起こり得ることとして考えるべきである。

ここまでの分析・検証から、「主体的な学び」を成立させるためには、自発的な創意工夫に取り組む前段階において、音楽的な見方・考え方を働かせながら表現するために最低限必要となる力を確実に身に付けさせておくことが必要であるということが言える。そのためには、観察やワークシートで「指導に生かす評価」を繰り返しながら実態を把握し、状況に応じてグループ活動を全体指導に戻して感覚をつかませたり、一部生徒のつまずきを全体で共有しながらグループ活動時のポイントとして明確化したりするなど、一時的に生徒の主体性と切り離して学習の道筋をつけることも有効な手段となる。

「主体的な学び」の場面において表現欲求と音楽の諸要素が結びついたとき、生徒はその成果を感覚的に実感することができる。こうした経験を他者との活動において言葉にして伝え合うことが「対話的な学び」となり、そこでの共感や共有は新たな価値意識を生み出し、学んだことの意味を実感として理解できるようになる。「深い学び」とは、こうした一連の流れの中で成立するものであり、その実現のための授業改善を意識し続けていくことが重要である。

参考資料

音楽Ⅰ　　＿＿月＿＿日（　）＿＿組＿＿番 名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

♪アカペラの響きを感じながら歌おうNo.１♪

① 2つの曲を聴いて、自分が感じた違いや共通点を考えましょう。どんな小さなことでも構いません。

違い
・
・
・

共通点
・
・
・

～アカペラ～

語源はイタリア語「a cappella(ア・カッペッラ)」からきている。Cappellaは日本語で「ア：　　」を意味し、元々は「イ：　　」の一つとして登場したのが始まり。ルネサンス期(１４世紀～１６世紀)、イタリアから西ヨーロッパにかけて文学・思想・芸術の文化運動が盛んに行われる。当時、派手で豪華な「イ」が多く作られていた中、歌詞が聞き取りやすいよう簡素化した「イ」が後のアカペラとなっていく。簡素化→「ウ：　　」、「エ：　　」で「オ：　　」を行う形式はその後「②」以外でも用いられ、発展していく。現在の日本ではエンターテイメントとしてのアカペラも広がっている。

② 参考音源を聴いて、美しいと感じるアカペラとはどういうものか、またそれを表現するためにどのようなエ夫が考えられるか、下のキーワードを使い文章でまとめてみましょう。

キーワード
拍子　　発声　　パート　　フレーズ

③ 美しいと感じるアカペラに近づけるために、実際に歌ってみてよかった点、難しかった点についてそれぞれの項目ごとに振り返ってみましょう。

	発声	ハーモニー	タイミング
よかった点			
今後にどう生かす？			
難しかった点			
その対策			

「歌ってみてよかった点」はあなたの「強み」、「難しかった点」はあなたの「課題」です。できるようになったことは、そのままあなたの強みにもなります。活動の中でできるようになったことは、上記の項目内や授業の振り返りに記入しておきましょう！！

参考資料

音楽Ⅰ　　月　　日（　）　　組　　番　名前

♪アカペラの響きを感じながら歌おうNo.２♪

アカペラをより良い演奏にするためにグループで表現の工夫を考えよう！

① グループで意見交換をして、より良い演奏にするための表現の工夫を以下の項目で考え、グループの聴かせどころを決めましょう。

強弱	
パートのバランス	
フレーズ	
歌い出し	
最後の「f」と曲の終わり方	
その他	

② グループの聴かせどころ

授業後の振り返り

日付	取り組み状況	よかった点	次回の課題	チェック

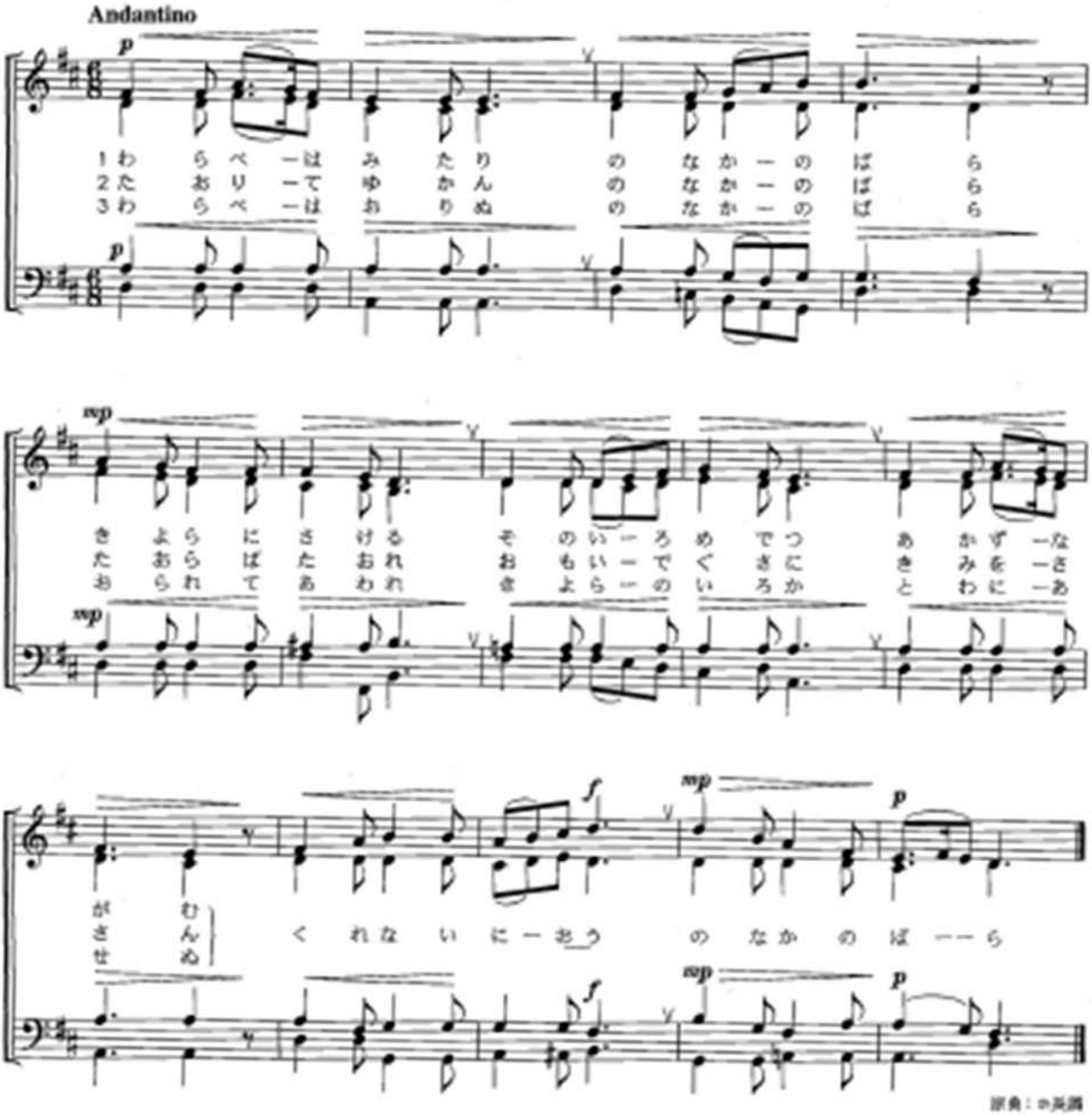
③ グループでの表現の工夫を楽譜に書き込んでみましょう！

参考資料

野ばら

Heidenröslein

近藤朔風日本語詞／ハインリヒ・ヴェルナー作曲／黒澤吉徳編曲



音楽Ⅰ　　月　　日（　）　　組　　番　名前　　　参考資料

♪アカペラの響きを感じながら歌おうNo.3♪

試験の振り返り

① 試験での発表を終え、グループや自分の成長できた点、自己評価を記入しましょう。

グループ

	音色(声質)	ハーモニー	その他 (練習時の取組・発表など)
グループ			

個人

	音色(声質)	ハーモニー	その他 (練習の取組・発表など)
個人			

自己評価(A・B・C評価)

	音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
グループ			
個人			

② 今回の学習を通じて、今後の学習に生かしていきたいことを記入しましょう。

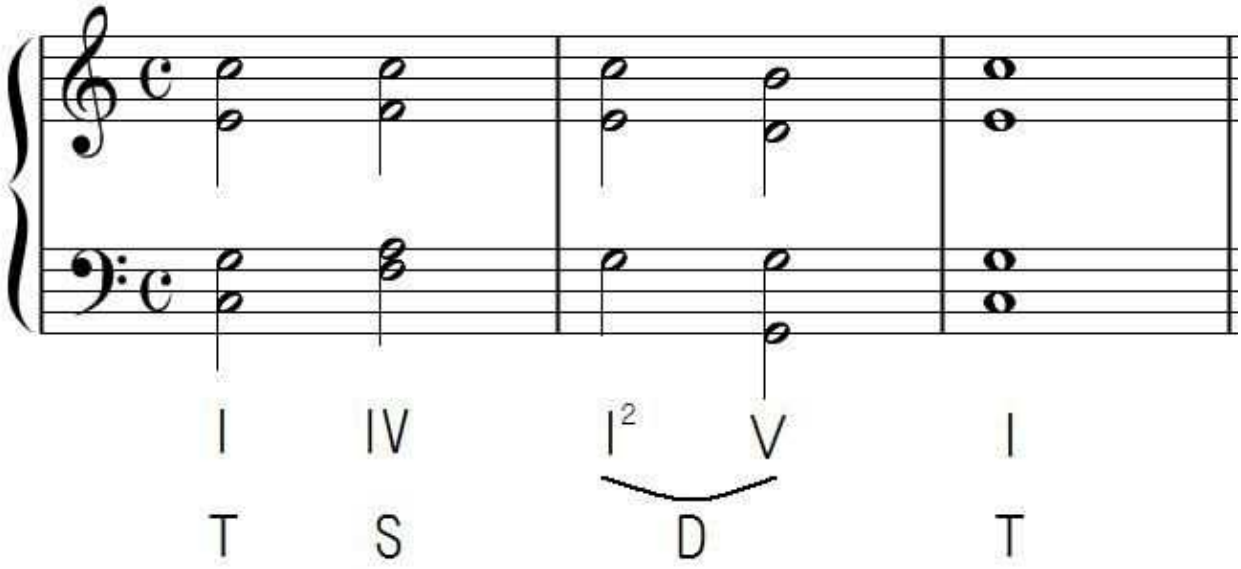
③ 今回の学習全体を通じて、今後の※音楽活動に生かしていきたいことを記入しましょう。

※音楽活動→普段の生活の中で、音楽を聴く、歌う、楽器を演奏するなどの活動

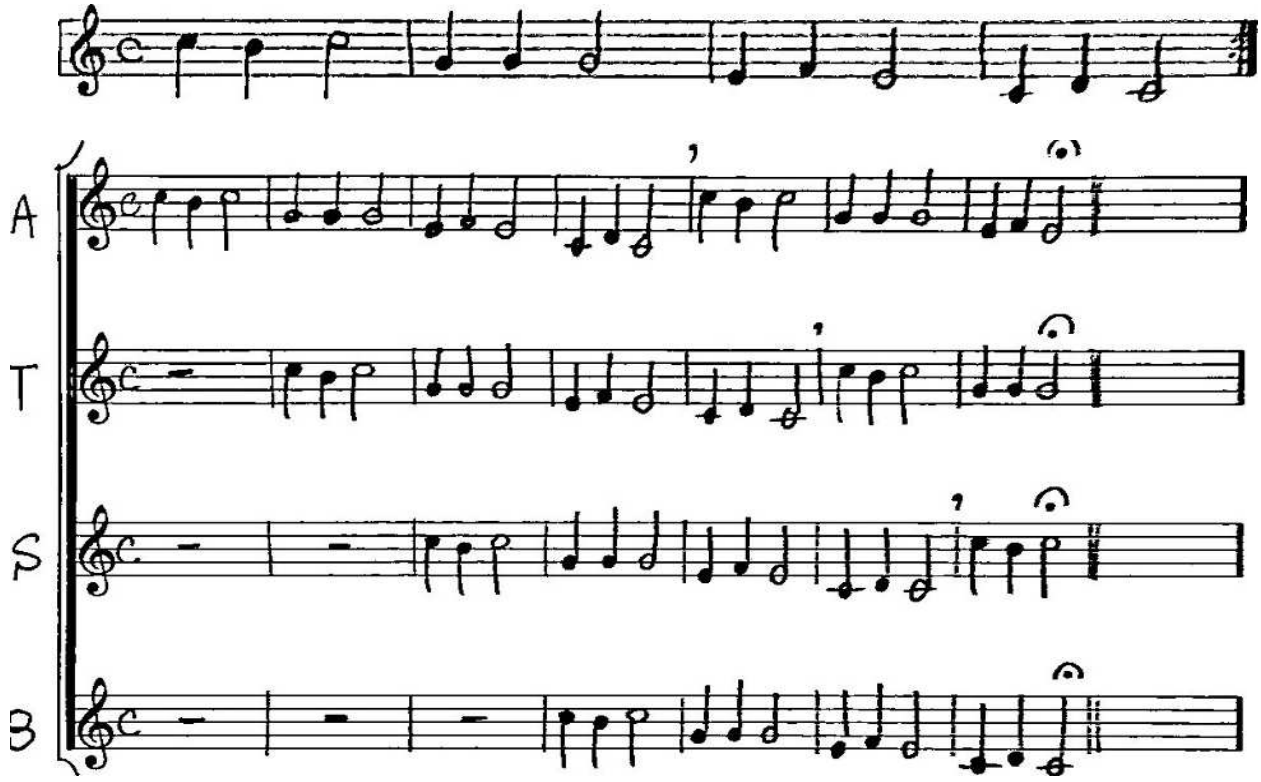
参考資料

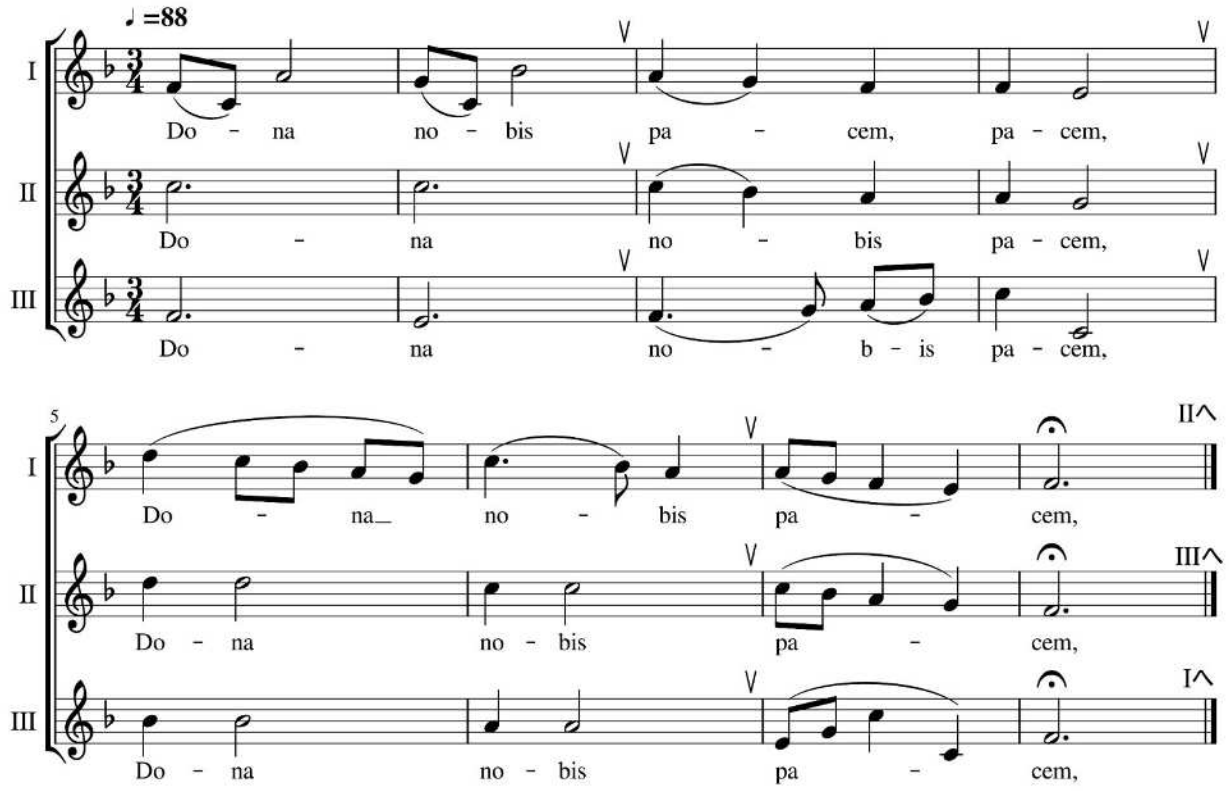
♪きれいなハーモニーを作る練習曲♪

A



B



C

Dona nobis pacem